

演劇的手法による情意要因の変化に関する研究 —中国の高校における日本語学習者を対象として—

姚 瑶

(芸術文化観光専門職大学 芸術文化観光学部 講師)

1. はじめに

近年、中国では大学へ進学するための全国統一試験の外国語科目は、昔の英語 1 科目から、日本語、ロシア語を加えた 3 科目の中から選ぶことができるようになり、大学受験を目指した日本語教育が広がっている。本研究は、中国の高校における日本語学習者の情意要因、主に動機づけと自信・自尊感情の向上を目指す教育支援方法の 1 つとして、演劇的手法を用い、実践活動のもとにその有効性を明らかにする。

2. 演劇的手法

言語習得には、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能を育成する必要がある。中国の高校で使われている教材は「読む、書く」というインプット中心の内容である。目標環境にいない日本語学習者にとって、演劇は教科書で習得した言語知識を安全に、何回でも試行可能なアウトプットの間である。さらに、演劇は他者との関係性や身体性を意識した音声に取り組んできた分野である。日本語教育における音声の正確性のほか、相手との関係、内容による話し方の違い、また話者の意図・態度・感情などで構成される「パラ言語情報」を習得するには、演劇を活用することが有効であると考えられる。

3. 調査

3.1 調査対象・内容

2023 年 8 月～9 月に中国江西省 A 高校の学習者 17 名を対象に、演劇的手法による活動（以下：活動）を 7 回行った。

3.2 調査方法

活動前と活動後、「日本語学習における心理的欲求尺度」および「日本語学習動機づけ尺度」の質問紙を配布した。回収率は 100% だった。

3.3 結果と考察

3.3.1 「日本語学習における心理的欲求尺度」

「日本語学習における心理的欲求尺度」には「自律性の欲求」（4 項目）、「有能性の欲求」（4 項目）、「関係性の欲求」（4 項目）の合計 12 項目があり、5 段階の測定となる。心理的欲求尺度の各下位尺度得点の変化は以下となる。

(1) 有能性の欲求 (活動後>活動前)

上演会という目標に向かって、学習者は未習単語、文法を調べたり、台詞を暗記したりして、最終的に仲間と一緒に上演会に参加するという過程を経て、自分の努力に満足し、有能性の欲求が満たされたと考えられる。

(2) 自律性の欲求 (活動後>活動前)

筆者は、学習者に単純な言葉の模倣をさせず、自律的に人物の人間関係や心理状況を分析ように指導した。また、教科書の中に出てくる場面の中からある状況を選び、役を与える。学習者は自分の言葉と表現を使ってその状況を演じる。また、教科書の会話文の問題点を考えさせた。学習者の創造力を刺激し、教科書にしばられない活発な展開が行われた。その結果、学習者は台詞や感情を模倣するではなく、状況の中で適切に振る舞うことによって感情が表現できた。

(3) 関係性の欲求 (活動後>活動前)

他者と共同で作業する楽しさ、一つの作品を作り上げる達成感を体験することで学習者の関係性の欲求を満たす原因だと考えられる。また、点数重視のテストと違って、学習者の日本語の正確さや流暢さだけでなく、能力以外の側面、例えば、声の質がいい、表情がいい、努力家であるなども教師が褒める材料として利用できることで、学習者の教師との関係性の欲求も満たされやすい。

3.3.2 「日本語学習動機づけ尺度」

「日本語学習動機づけ尺度」には「内発的動機づけ」(4項目)、「同一視的調整」(4項目)、「取り入的調整」(3項目)、「外的調整」(3項目)、「無動機」(4項目)の合計18項目があり、5段階の測定となる。動機づけの各下位尺度得点の変化は以下となる。

- (1) 内発的動機→大きな変化
- (2) 同一視的調整・取り入的調整→上昇
- (3) 外的調整→僅かな変化、有意ではなかった
- (4) 無動機→下降

この結果は対象となった学習者が演劇的活動を通して日本語を学ぶ楽しさが体感でき、自ら意欲的に学習しようとしていることを示すものである。演劇的活動を通して、学習者が日本語学習の重要性と価値に対する意識が高まったことを象徴するものである。外的調整は学習に対して否定的な感情を持ち、外的な圧力によって行動が支えられていると言われるが(廣森 2006)、被験者は大学入試を目標している日本語学習者のため、「よい成績を取りたい」、「日本語を勉強するのは、決まりのようなものだから」という考え方で、日本語学習を消極的に捉えていないと言える。

したがって、教育活動の介入があっても、その考え方に変化がなかった。最も大きな変化が確認されたのは無動機に関する各項目である。各項目の尺度平均は下降が確認された。この結果は、日本語学習に対して無関心の状態から関心を寄せる状態に大きく変化したことを示すものである。演劇的活動を通して、日本語学習に対して否定的、消極的な感情を軽減し、積極的に学習に取り組むように変化したと考えられる。

4. おわりに

本研究は限られた人数の学習者を調査対象としたものであり、結果の一般化は更なる検討が必要である。今後は、継続的な活動の実施と観察を行い、研究を進めていきたい。

参考文献：

- 清末逸子（2005）「演劇的活動を取り入れた日本語学習—ドラマ作りと即興演劇的活動を取り入れた会話授業の実践を通して—」横浜国立大学国語・日本語教育学会『横浜国立大学 国語研究』23 pp.48-38
- 倉八順子（1991）「外国語学習における情意要因についての考察」『社会学心理学教育学』慶応義塾大学大学院社会学研究学紀要 第33号 pp.17-25
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）（2010）『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』大修館書店
- 廣森友人（2006）『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 多賀出版

